

中央労福協ニュース No.105 NEWS LETTER

労働者福祉中央協議会（中央労福協）

発行人 大塚 敏夫

〒101-0052

東京都千代田区神田小川町3-8 中北ビル5F

Tel 03-3259-1287 URL <http://www.rofuku.net>

生活困窮者自立支援制度がスタート

4月1日から生活困窮者自立支援法が施行され、生活保護に到る手前での新たなセーフティネットの制度がスタートした。官民の幅広い協働のネットワークのもと、就労支援などの実効性を高め、地域に根付いた制度に育てていくことが必要である。

◆ 現場の実践から制度化

新法の施行に伴い、福祉事務所を設置する約900の自治体で、困窮者の相談を受けて一人ひとりの状況に応じた支援プランを作成し必要な福祉サービスにつなげる「自立相談支援事業」と「住居確保給付金」が必須事業となる。また、任意事業ではあるが、就労準備支援、家計相談支援、一時生活支援、学習支援などの枠組みも設けられた。複合的な課題を抱えた方々に早期に寄り添い型の支援をしていくことで、誰もが排除されず、社会とのつながりの中で自立できる支え合いの社会・地域づくりにつなげていくことが期待される。

同制度は、2010年から始まったパーソナルサポートサービス・モデルプロジェクトの実践をもとに、厚労省の特別部会で検討され、2013年12月に生活困窮者自立支援法が成立した。現場の実践から法律が生まれ、現場のノウハウが制度設計に結びついたところに意義がある。同モデル事業には、労福協からも沖縄、長野、山口、徳島、新潟、千葉（野田市）の労福協が参加し、制度づくりの一翼を担ってきた。また、法案成立以降は、昨年の生活底上げ・福祉強化キャンペーンの取り組みの一環として、40都道府県の労福協が生活困窮者支援制度に関する自治体への要請・協議を行うなど、制度を実効あるものにするため取り組みを行ってきた。

◆ 就労支援を広げ、実効的な制度に

制度はスタートしたが、課題は山積しており、これからが正念場である。制度が機能するためには、相談だけでなく出口となる就労支援や居場所づくりなど様々な支援が不可欠である。しかし、就労支援は任意事業であるために、3割程度の自治体しか行っておらず、実施している地域においても大半は福祉部局中心のため、雇用部局との連携が弱く、実践的な研修や体験を通じての就労支援の体制が立ち遅れている地域が多いのが現状だ。

中央労福協は3月4日に宮本太郎氏（中央大学教授、生活困窮者自立支援全国ネットワーク共同代表）と意見交換を行い、就労支援の体制をつくり地域に受け皿を広げていくために、労福協や労働関係者がより積極的に関与していくことが必要

との認識を共有した。今後、施行後の実態を踏まえて課題を整理し、制度改善も含めて取り組んでいきたい。

連合も、3月26日に開催された地方連合会事務局長会議において宮本教授を招いて勉強会を行った。宮本氏は、連合や労働組合への期待として、「①職場では、中間的就労の場の提供など共生型雇用近づけていくための条件づくりをお願いしたい。そのことは、現在の組合員にとっても居心地の良い職場となり、ディーセントワークの実現にもつながるので、一体的に取り組んでほしい。②市町村においては、福祉部局と雇用部局が連携していく要の役割を果たし、就労準備支援の実践に向けてノウハウを伝授してほしい。③都道府県では、自治体の広域連携による任意事業の実施を働きかけてほしい。」と問題提起を行った。

一般就労だけでなく、協同労働で自ら仕事つくっていくことも重要だ。全国で約50箇所の自治体で困窮者支援事業を受託するワーカーズコープは、3月29日に首都圏関係者による制度実施直前集会を開催（中央労福協も後援）し、「生活困窮者を生まない地域づくり」をテーマに、当事者主体のまちづくりと就労創出により、地域に多様なネットワークを広げていく決意を固め合った。

◆ 民主党は実施状況の調査・点検活動へ

民主党共生社会創造本部では、新たに制度化されたセーフティネットを全国各自治体で構築するために、「非正規雇用・ワーキングプア対策チーム」と「働き甲斐のある人間らしい仕事（DW）推進協議会」を中心に、各地域での活動支援を行うことを決定した。昨年からの先進事例のヒアリング調査を行っており、3月7日には長妻代表代行が徳島県労福協を訪問・視察し、困窮者支援・就労支援、若者支援の実情や課題について意見交換を行った。各地のヒアリングをまとめた事例は3月末に各都道府県連や議員に情報提供が行われた。

民主党は、統一地方選後の5月から、各自治体の生活困窮者自立支援事業の実施状況に関する調査・点検活動と、各自治体への提案、議会質疑などを予定している。

京都労福協 労働者自主福祉運動の「歴史と促進」研修会を開催

京都労福協は2月10日(火)ラポール京都2階大ホールに於いて、労働者自主福祉運動の「歴史と促進」研修会を開催、会員組織から90名が参加した。

研修会の目的は、京都労福協組織内における新しい労働者福祉運動の構築の一環として、労働運動・労働者福祉運動の理念・歴史の伝承者(リーダー)を育成し、新たな活動の広がりを生み出すためと、労働組合と事業団体が「ともに運動する主体」としての関係の再構築をはかり、組合員の

利用促進や共助拡大につなげると共に、労働団体・事業団体・労福協の三者が一体となった取り組みを進めることで、その趣旨のもと、参加対象者は各団体の職員・現職役員・次世代を担う役員クラスの方々に呼びかけた。

先ず、講演では中央労福協・前事務局長の高橋均氏から「労働運動・労働者福祉運動の理念・歴史、そして課題」をテーマの講演で、労働金庫、全労済をはじめとする各事業団体がつくられてきた経緯や理念を含め、現在、事業団体が抱える課題について、労働団体、労福協がどのように連携と協力体制を取っていくべ



高橋均氏をコーディネーターにしたパネルトーク

きなのかといった意味深い講演であった。

続いて、高橋氏をコーディネーターにして、労働団体・事業団体・労福協の各代表をパネラーにして、パネルトークを行った。その中で、組織率低下の問題など労働団体が抱える課題や、事業団体からは困難な事業推進の現状と将来に向けての取り組みが述べられ、労福協からは双方の現状の中で労福協が果たす役割と考え方について提起された。

事業団体が創設された理念や歴史を学び、今後それぞれの団体がどのように対応していくのか考える機会になった有意義な研修会であった。



愛媛県労福協

労福協・会館 第1回縁結び出会いイベント(婚活事業)

勤労会館と労福協の協働事業「縁結びサポート事業(婚活)」の第1回出会いイベントを昨年12月14日にピュアフル松山にて開催、労組・事業所等17組織から60名(男女とも30名)が参加した。

出会いイベントは、参加者全員が一組2分ずつ自己紹介の1対1トークからスタートし、その後デザートビュッフェを食べながらのフリートークと、終始和やかな雰囲気に進んだ。

フリートーク後、会館のチャペルを参加者全員で見学、勤労会館スタッフからピュアフル松山のバージンロード・ウェディングなどについて話がいった。

マッチング結果は、14組のカップルが誕生。結婚支援センタースタッフから「これまで実施して

きたイベントの中でも、かなり高いカップル誕生率」との感想があった。

第2回イベントは5月17日に予定しており、第1回イベントの経験や参加者からの意見等を活かしながら、より良いイベントにしていきたい。

(感想：イベント運営スタッフから)

フォロースタッフ(労組の婚活事業担当者)

地元に戻った際に、縁結び事業に参画してない組合も多くあるので、今回のイベントの様子等をしっかり伝え、より多くの組織や組合員に参加してもらえるよう呼びかけを行いたい。

勤労会館：担当職員

初めての取り組みで至らない点もあったが、多方面の方々のご協力で無事終わることができた。今回は法人会の方々のサポートがあったが、これからは自分達での運営になる。今後は、参加者により楽しんで頂き、ご縁がつながる場になるよう盛り上げていきたい。



参加者が全員見学した会館チャペル

広島県労福協が「メンタルヘルスセミナー」を開催

～広島・福山の2カ所で開催、「コミュニケーション力の向上」について学ぶ～



広島県労福協は広島県労働協会から「メンタルヘルスセミナー」を受託し、1月17日広島市のワークピア広島、1月24日福山市の福山労働会館みやびの2カ所で開催した。

厳しい経済情勢の中、企業の雇用形態や職場環境の変化により、現在の自分の仕事や職業生活に強い不安、悩み、ストレスを感じている労働者は約6割に上っている。また、過去1年間（2011年11月1日～2012年10月31日）にメンタルヘルス不調により連続1ヶ月以上休業、又は退職した労働者がいる事業所の割合は、8.1%となっている。（平成24年「労働者健康状況調査」厚生労働省調べ）

さらに、警察庁が取りまとめた、2013年の全国自殺者数は前年に比べ575人少ない27,283人で、前年に続き3万人を下回ったものの依然として高い水準にあり、そのうちの26.7%（7,272人）が被雇用者である。県労福協は社会問題化している職場のメンタルヘルス対策として、今年度も広島県労働協会から事業を受託し、広島県経営者協会の後援のもと「コミュニケーション力の向上」をテーマに広島と福山でセミナーを開催した。



広島会場のセミナー

①広島会場（1月17日、ワークピア広島、参加者142名、講師 広島産保センター相談員 加登朝子さん）

職場の良好な人間関係を築くためには、ストローク（自己および他者の存在を認めるための働きかけ）の仕方、肯定的なストロークの与え方等や健全なストロークの環境づくりが重要である。職場の人間関係の基本は聴く（Listen心を聴く）ことで、コミュニケーション力の向上が大切である。アサーション（自分も相手も大切にしたい自己表現で、自分の要求、気持ち、考え、価値観などを率直に正直にその場で適切に伝える手法のこと）の

技法を用い、コミュニケーション上手になろう。そして、I（アイ）パワーで、心に届くメッセージを発信しようと講演された。

＊ストローク：自己および他者の存在を認めるための働きかけ。

＊アサーション：自分も相手も大切にしたい自己表現で、自分の要求、気持ち、考え、価値観などを率直に正直にその場で適切に伝える手法のこと。

＊I（アイ）パワー：

■ I（アイ）を知る（知っているようで一番知らないのが自分のこと）

■ I（アイ）メッセージ（私を主語に語るこの意味。人は自分の言葉に最も納得する

■ 5つのアイ（愛情・Eye<目>・挨拶・愛嬌<笑顔>・あいづち）

②福山会場（1月24日、福山労働会館、参加者119名、講師（株）C'sPORT代表取締役 森田由美子さん）

コミュニケーションとは情報・知識・感情・意思を複数人で分かち合い、共有することで、双方向でなければいけない。うなずき、あいづち、繰り返しなど関心を向けているというサインを送るなど、話し手が話したいように聴く（listen）スキルが大切（重要）である。

これからのメンタルヘルス対策は、すべての従業員のメンタルヘルスを重要な経営資源と捉え、組織を活性化するために職場全体の健康度を積極的に底上げしていくという視点が求められていると講演された。



福山会場のセミナー



第9回 連合・ILEC

幸せさがし文化展

どなたでも応募できます

絵画 | 写真 | 書道 | 俳句 | 川柳

募集期間 (俳句・川柳) **2015年2月1日～5月15日**

募集期間 (絵画・写真・書道) **2015年4月1日～5月15日**

作品募集

◆賞 俳句・川柳 連合大賞・ILEC大賞 各5万円 ほか

絵画・写真 連合大賞・ILEC大賞 各10万円 ほか

◆主催 連合、(公社)教育文化協会

◆お問い合わせ (公社)教育文化協会(略称: ILEC) TEL: 03-5295-5421

詳しいことは [幸せさがし文化展](#) [検索](#)

中央労福協の新事務局員紹介

全労済から中央労福協事務局に配属となった栗岡さんと、新規採用された佐野さんを紹介します。

栗岡 勝也（くりおか かつや）さんの紹介

年齢 満44歳
血液型 A型(見た目は大型)
出身地 兵庫県
家族構成 可愛い奥さま？とさらに可愛い猫1匹



全国の労福協の皆さま！
はじめまして、このたび4月1日より、全労済から中央労福協事務局に配属となりました栗岡と申します。

職歴としましては、1993（平成5）年4月に労働者共済発祥の地大阪の全労済に入会し、共済推進を通じて多くの経験をさせていただきました。特に、大阪労福協の皆さんとはいろいろな活動交流の場で一緒にさせていただきました。

趣味はスポーツをすることで、特に野球とゴルフが好きです。あとご当地グルメの食べ歩きが大好きです。ぜひ各地の美味しいお店を教えてください。

中央労福協では、前任の山崎事務局次長の後任ということで、中部ブロックと南部ブロックを担当させていただくこととなりました。偉大な山崎さんの後任ということでかなりプレッシャーを感じておりますが、持ち前の元気と明るさで中央労福協のムードメーカーになれたらと思っています。

東京での仕事も生活も何もかもが初めてのことで、不慣れな点が多々あり、皆さまにはいろいろとご迷惑をおかけするかと思いますが、1日も早く地域の労働者福祉向上のお手伝いができるよう精一杯頑張りますので、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

佐野 敬太郎（さの けいたろう）さんの紹介

年齢 35歳
血液型 AB型
星座 おうし座
出身地 神奈川県川崎市



はじめまして、4月1日より新規採用されました。佐野と申します。

前職は年金事務所に勤務し厚生年金の適用業務や保険料徴収業務を担当していました。

趣味は「釣り」「スノーボード」「一人旅」で一年を通して休日はだいたい外に遊びに行っています。温泉も大好きで地方の共同浴場なんて大好き物です。見た目はインドアと良く言われますが…実はアウトドア派です！

今後は大塚事務局長と東部ブロックを担当することとなりました。一つ一つを確実に吸収し一日も早く仕事を覚え一人で担当できるよう頑張ります。また中央労福協の職員として様々な社会問題に関われることに非常に嬉しく思う反面、責任の重大さも感じています。

皆様にはご迷惑をかけると思いますが持ち前のフットワークの良さを活かして頑張ってまいりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

コラム

「団結ガンバローと万歳三唱の起源」

労働組合の集会の最後は「団結ガンバロー」で締めくくることが定番になっている。この作法・動作はいつごろ始まったのだろうか。

労働歌「がんばろう」は、1960年6月の三井・三池争議の最中に作られた。「がんばろう。つきあがる空に、くろがねの男のこぶし…」ではじまる歌詞を覚えていた方は多いだろう。この争議を支援するために全国から集まり、がんばろうを歌った2万人の労働組合活動家たちが地元に戻り、ガンバローが急速に普及したのであった。実際、翌年8月の総評大会の閉会時に初めて、労働歌（インターナショナル）の合唱に続いてこぶしを空に突き上げる「団結ガンバロー」が叫ばれた。

では、それまでの総評大会はどうだったのだろうか？1960年8月の閉会は何と「万歳三唱」をもって終わっていたのだ。1958年8月の総評新聞にも、「太田議長の声頭で万歳発声に一同唱和三唱」したと記録されているから、戦後しばらくの間、労働組合では万歳が多く使われていたと思われる。

「万歳」は中国では君主の長寿を祝うために昔から使われていたのだが、日本で使われたのは意外と新しい。明治22年の国会開設時に明治天皇に向かって臣下が唱和したのが始まりだという。戦時下、出征兵士を「万歳」で見送ったのも、国会解散で「万歳」を叫ぶ習慣も、天皇に向かって行うことにつながっている。その天皇を祝する作法であった万歳が、戦後一転、左派といわれた総評大会で、しかも太田薫議長の声で聞こえていたとは驚きだった。

とはいえ、労働組合が分立していた4団体時代でも、中央メーデーだけは統一して行われており、そのメーデー宣言には「メーデー万歳」が記されるのが普通であったから、戦後は左右を問わず万歳めでたい時に「万歳」が使われるようになったのではなかろうか。

この他、三本締め、一本締め、エイエイオー、拍手なども使われていたのではないかと推察されるが、戦後の総同盟や産別会議ではどうしていたのであろうか？ご存知の方があれば教えてください。そして、まだ探究は続く。（高橋均）